

「永正八年月次和歌御会」をめぐつて

——七月二十五日和歌御会を中心に——

三 村 晃 功

一 はじめに

いまから二年ほど前であつたろうか、宮中における和歌会などの情報を伝える和歌懐紙が、思文閣出版から刊行の『思文閣墨蹟資料目録』（第二百五十三号、平成五・七）に掲載され、室町時代の和歌研究に従事している筆者に、多大の興味、関心を抱かせることがあつた。当該懐紙はその後、大阪青山短期大学の所蔵に帰し、このたび、伊井春樹氏によって「永正八年七月二十五日和歌懐紙について」（『詞林』第十七号、平成七・四）なる論考となつて、その全容が公開された。まことに慶賀のいたりである。この論考で、伊井氏は、本懐紙が永正八年（一五二）七月二十五日の御会和歌で、「懐紙には、初めに『秋日詠三首和歌』とし、『初秋月』『風前薄』『寄玉恋』の三首が記されており、現存本の詠者は『式部卿邦高親王』『正二位実隆』など二十八人である」が、しかし現在、これ以外に「少なくとも後柏原天皇、後奈良院、政為も御会和歌に出詠していたはずで、これだと三十一人からの構成による和歌会だったことになる」と推断されている。じつに正鵠を射えた論述で、有益な論考と評しえよう。

ところで、永正八年七月二十五日に催行されたことになっている（実際には催行されなかった）和歌御会については、その一部を拙稿「『文安三年七月二十一日公宴続歌』をめぐる」（『光華日本文学』第三号、平成七・八）で紹介したように、宮内庁書陵部蔵にかかる『公宴続歌』（全二十九冊、写本）に具体的記事が認められる。すなわち、『公宴続歌』には、伊井氏が言及された以外に八人の詠作が各々認められ、現時点では都合三十九人の「永正八年七月二十五日御会和歌」を指摘できるのである。

こういう次第で、本稿では、『公宴続歌』に認められる永正八年の和歌御会についての記事を紹介し、あわせて伊井氏のご論考の補足にも及びたいと思う。

二 『公宴続歌』に記載の永正八年月次和歌御会

さて、『公宴続歌』については、すでに福井久蔵氏が『大日本歌書総覧中巻』（昭和四九・五再刊、国書刊行会）に、

公宴続歌 写二十九卷／永享・宝徳・享禄より元和四年までの朝廷における歌会の歌を収録したるもの。図書

寮に一本あり。一卷末に云ふ。本云元和元年七月十五日公福書之。右借請阿野少将公業本・故中将公福朝臣筆、

令_ニ印盛書写_一校合畢、寛永五応陽十三日相公羽源親顕、の識語あり。／一卷は永享十一年正月廿日内裡内々御

会より同年度に於ける十五度の御会歌を始め、同十二年のもの、文安三年四年のものを収め、二巻には文安五年のもの、宝徳二年のものを収め、三巻には宝徳三年のものを、四巻には同四年のものを、五巻には年次不明

（但し宝徳・享徳の頃のものなるべし）の分を、六巻には寛正三年・四年の分を、七巻には文明九年の分及十

二年より十八年までのものを、八巻には長享三年・延徳元年・明応元年・同七年の分を、九巻には文亀二年・

三年・四年のもの及永正元年の分七種を、十巻には同二年・三年のものを、十一巻には同五年・六年の分を、

十二巻には永正七・八年の分を、十三巻には同九・十年の分を、十四巻には同十一・十二年の分を、十五巻には同十四・十五年の分を、十六巻より十八巻までには永正十五年より十八年の分を、十九巻には大永元年・二年・六年・七年の分を、二十巻には大永八年の分を、二十一巻には享禄元年より三年までのものを、二十二巻には享禄四年のものを、二十三巻には天文元年及三年の分を、二十四巻には天文八年及十年の分を、二十五巻には天正十一年・十五年・十六年・十八年・二十年の分を、二十六巻には慶長五年の分を、二十七巻には慶長六年の分を、二十八巻には慶長九・十・十二・十三・十四十五年のものを、二十九巻には慶長十六年・十七年・元和四年のものを収めたり。この類にてはよく類聚せられたるものと謂ふべし。図書寮に一本あり。

のとおり言及されているが、このうちの『公宴続歌』十二冊目に「永正八年御会和歌」は所収されている。ちなみに、本冊の書誌に簡単に触れておくと、本冊は花柄模様の表紙に「公宴続哥永正七同八」と記した題簽を左上方に貼る。内題、端作りなどは欠く。墨付百十五丁、袋綴の写本。一面十二行書き。第一冊目の「永享十二年正月廿八日禁裏御哥初」の末に「寛永五応陽（鐘力）十三日相公羽林源親顯」とある識語から、寛永五年（一六二八）十月以降の書写になるか。

ところで、この『公宴続歌』によると、永正八年に出詠された月次御会和歌は、おおよそ次のとおりである。

① 永正八年正月十九日和歌御会始（尾題）

〔題者〕 飛鳥井中納言 〔読師〕 記載なし 〔講師〕 雅綱

〔歌題〕 寄若菜祝

〔作者〕（後柏原天皇） 茶地丸・邦高親王・貞敦親王・実隆・実香・宣胤・政為・季経・季種・元長・雅俊・宣秀・和長・守光・永宣・濟継・公条・尚顕・公音・季綱・冬光・康親・実胤・為学・隆康・為和・雅業王・

言綱・伊長・秀房・雅綱・重親・諸仲 「追加」 堯胤・仁悟・道永・常信・宗清

〔巻頭歌〕 わかなつむみやこの、べも松の雪いく世つもれる年とかはしる

〔巻軸歌〕 わがみどりまたたちそひて七草になをいく春の色をかさねん

② 永正八年二月廿五日（尾題）

〔題者〕 勅題

〔歌題と作者〕 立春・（後柏原天皇） 山霞・邦高 海霞・茶地丸 初鶯・貞敦 若菜・堯胤 曙梅・道永 紅梅

・仁悟 河柳・常信 春雨・実隆 春月・実香 帰鴈・宣胤 尋花・政秀 朝花・季経 落花・宗

清 春駒・季種 苗代・俊重 躑躅・元長 款冬・重治 松藤・雅俊 暮春・宣秀 首夏・和長

卯花・守光 山葵・永宣 菖蒲・済継 郭公・公条 早苗・尚顕 夏草・公音 夏月・季綱 梅雨

・冬光 鵜河・康親 夕顔・（後柏原天皇） 夕立・為学 杜蟬・隆康 納涼・言綱 夏祓・為和

立秋・雅業王 残暑・伊長 七夕・秀房 曉萩・雅綱 萩盛・重親 夕薄・邦高 山鹿・堯胤 松

虫・政為 初鴈・常信 秋田・雅俊 待月・（後柏原天皇） 湖月・季経 惜月・宣胤 夕霧・季

種 擣衣・源諸仲 野分・実隆 江鶉・宗清 秋霜・実香 黄葉・言綱 暮秋・道永 時雨・邦高

木枯・済継 落葉・重治 枯野・和長 田氷・宣秀 寒月・守光 千鳥・永宣 水鳥・尚顕 篠霰

・俊量 初雪・公条 深雪・公音 埋火・冬光 鷹狩・季綱 神楽・（後柏原天皇） 歳暮・季房

初恋・仁悟 忍恋・永宣 聞恋・俊量 見恋・為学 尋恋・隆康 析恋・季種 契恋・重治 待恋

・茶地丸 遇恋・元長 別恋・雅業王 顕恋・宣胤 稀恋・常信 忘恋・済継 恨恋・堯胤 絶恋

・為和 関鶏・道永 山家・雅俊 田家・仁悟 嶺松・季経 籬竹・康親 路苔・重親 岡篠・雅

綱 沿葦・和長 嶋鶴・伊長 樵夫・政為 旅行・（後柏原天皇） 野宿・実隆 眺望・宗清 神祇

・実香 祝言・貞敦

〔巻頭歌〕 いく世にも都の空に立かへりふるき道しる春はきぬらん

〔巻軸歌〕 治れる風をうつして君が代になびくや民の草葉なるらむ

③ 永正八年三月廿五日月次和歌御会（尾題）

〔歌題〕 花下言志 残花薫風 忍伝書恋

〔作者〕（後柏原天皇）・貞敦親王・実隆・宣胤・政為・季経・季種・俊量・元長・重治・雅俊・宣秀・和長・守

光・永宣・済継・公条・尚顕・公音・季綱・冬光・康親・実胤・為学・隆康・為和・言綱・伊長・秀房・

雅綱・重親・諸仲〔追加〕 堯胤・仁悟・道永・常信・宗清

〔巻頭歌〕 暮にふりまだこのまゝに下ぶしの花をば夢にみはてずもがな

〔巻軸歌〕 大かたにかずやるふみのことのはをしのぶゆへとや人もつたへよ

④ 永正八年四月廿五日（尾題）

〔題者〕 冷泉大納言政為卿出題

〔歌題と作者〕 早春・（後柏原天皇） 春雪・仁悟 野鶯・実香 海霞・常信 関霞・宣胤 朝若菜・政為 庭梅・

堯胤 夜梅・（後柏原天皇） 夕帰雁・実隆 栽花・道永 待花・茶地丸 尋花・貞敦 翫花・宗

清 惜花・俊量 残春・季経 首夏・雅俊 夏草・元長 初郭公・季種 嶺郭公・和長 杜郭公・

重治 池菖蒲・宣秀 故郷橘・尚顕 山五月雨・（後柏原天皇） 沢蚩・永宣 樹陰納涼・季綱 初

秋・公条 行路秋・公音 山家虫・済継 夕萩・隆康 谷鹿・為学 原鹿・康親 嶋月・為和 江

月・実胤 浦月・雅業王 橋月・堯胤 河月・邦高 暁擣衣・実隆 遠村紅葉・宗清 古寺紅葉・雅俊 暮秋・(後柏原天皇) 田家時雨・政為 野徑霜・伊長 寒夜千鳥・重親 水郷寒芦・秀房 湖水・実音 林雪・宣胤 岡雪・言綱 深夜霰・雅綱 歲暮・茶地丸 寄名所恋・仁悟・道永・常信・実隆・(後柏原天皇)・季経・宗清・俊量・元長・重治・雅俊・季種・宣秀・永宣・濟繼・尚顯・公音・季綱・実胤・為学・隆康・言繼・伊長・重親・源諸仲 春旅・実香 夏旅・公条 秋旅・邦高 冬旅・季房 暁旅・重治 山述懷・雅業王 河述懷・政為 海述懷・康親 里述懷・宗清 関述懷・和長 寄天祝・為和 寄日祝・宣胤 寄月祝・季種 寄星祝・元長 寄雲祝・雅綱 伊勢・貞敦 石清水・俊量 賀茂・政為 春日・実隆 住吉・(後柏原天皇) 大日・道永 釈迦・堯胤 阿弥陀・季経 薬師・常弘 弥勒・仁悟

〔卷頭歌〕春といへどまだひとしほの色もなし小松が原は雪もけなくに

〔卷軸歌〕冬ごもる心の中に春がすみ龍の花さく時やまつらん

⑤ 永正八年五月廿五日月次和哥御会(尾題)

〔歌題〕夏杜 夏鳥 夏夢

〔作者〕御製(後柏原天皇)・茶地丸(後奈良院)・邦高親王・貞敦親王・実隆・実香・宣胤・政為・季経・季種・俊量・元長・重治・雅俊・宣秀・和長・守光・永宣・濟繼・公条・尚顯・公音・季綱・冬光・康親・実胤・為学・隆康・為和・雅業王・言綱・伊長・秀房・雅綱・重親・諸仲〔追加〕宗清

〔卷頭歌〕夏ふかきもりのした草花ならでさかり過たる花もこそあれ

〔卷軸歌〕みじか夜をおもひねにしてをのづからみはてぬゆめは名残だになし

⑥ 永正八年六月廿五日（尾題）

〔題者〕出題宗清

〔歌題と作者〕都立春・茶地丸 遠嶋霞・堯胤 若水・実香 若菜知時・貞敦 寢覚鶯・道永 梅香留袖・宣胤

谷蔵・実隆 岳柳蔵橋・常弘 海辺春曙・（後柏原天皇） 故郷春月・政為 春日祭・季種 花雲・

邦高 依花忘老・宗清 三月三日・重治 雲雀幽・仁悟 簾外燕・元長 径堇・俊量 松下躑躅・

宣秀 扉藤・季経 季陽已蘭・和長 朝葵・尚顕 南北郭公・永宣 葺菖蒲・済継 騎射・康親

橘薫枕・公音 水郷早苗・雅綱 連夜照射・為和 山陰鶉河・冬光 閨扇・雅業王 漁村晚立・季

綱 澗底泉・隆康 初秋露・政為 一星適逢・貞敦 深更荻・伊長 萩移流・言綱 薄滋・仁悟

槿一日栄・（後柏原天皇） 稻妻・秀房 閑居虫・実隆 相撲節・宗清 左右聞鴈・宣胤 鹿声夜友

・茶地丸 江鶉・重親 古寺秋夕・道永 湖月似氷・邦高 独対月・実香 霧間塩竈・常弘 沢鳴

・宗藤 疎屋葛・季種 紅葉待霜・元長 鐘声送秋・俊量 岡時雨・季経 樵路落葉・重治 残菊

・宣秀 杜木枯・仁悟 寒樹交松・尚顕 懸樋氷・為和 泊千鳥・守光 水鳥知主・秀房 霰残夢

・永宣 馱雪・雅業王 雪中鷹狩・季綱 暁神楽・俊量 名所炭竈・公音 追儼・政為 老少惜歳

・季種 隱名切恋・（後柏原天皇） 契春秋恋・堯胤 馴恋・康親 卜遇恋・宗清 幼恋・重治 被

嫉妬恋・和長 辞後会恋・元長 咎言恋・実隆 見昼慰恋・言綱 欲代命恋・邦高 恥身恋・隆康

触事恨恋・実香 悲離恋・冬光 悔前世恋・雅綱 梯嵐・道永 庭樹高低・済継 竹為師・伊長

遠帆連浪・宗藤 牧笛・貞敦 田家灯・宗清 浄侶暮帰・常弘 輦車・実隆 憂喜同夢・季経 筆

写人心・重親 拝趨積年・宣胤 旅杖・公条 述懷非一・為学 空諦・堯胤 寄道祝世・政為

〔卷頭歌〕 雪きゆる都の野べの朝がすみ春くる道をあまたにぞみる

〔卷軸歌〕 たまはこの道といふみちは君が代のひかりやなべてしるべ成らむ

⑦ 永正八年七夕詩御会公宴（尾題）

〔詩題〕 賦星河落簷

〔作者〕（後柏原天皇）・貞敦親王・実隆・長直・元長・宣秀・和長・章長・公条・康親・為学

〔卷頭詩〕 乞巧楼前夜未央 銀河影落白於霜

簷牙高啄水渦月 却為女牛分得涼

〔卷軸詩〕 簷牙高处掛銀潢 挽得簾前星渚涼

情緒縦猶雖似淡 斯盟可与水天長

⑧ 永正八年七夕和歌御会公宴（尾題）

〔歌題〕 賦星河落簷

〔作者〕（後柏原天皇）・茶地丸・邦高親王・貞敦親王・実隆・実香・宣胤・政為・季経・宗清・季種・俊量・元

長・重治・宣秀・和長・守光・永宣・済継・公条・尚顕・公音・季綱・冬光・康親・実胤・為学・隆康・

為和・雅業王・言綱・伊長・秀房・雅綱・重親・宗綱・諸仲

〔卷頭歌〕 霧はるゝあふぎのかぜに影落てのきばにすめる天河なみ

〔卷軸歌〕 あまのかはあふせの波もへだてなくおもへばおなじ軒の松かぜ

⑨ 永正八年七月廿五日月次和歌御会（尾題）

〔歌題〕 初秋月 風前薄 寄玉恋

〔作者〕（後柏原天皇）・茶地丸（後奈良院）・邦高親王・貞敦親王・実隆・実香・宣胤・政為・季経・季種・元

長・重治・宣秀・和長・守光・永宣・公条・尚顕・公音・季綱・冬光・康親・実胤・為学・隆康・為和・

雅業王・言綱・伊長・秀房・雅綱・重親〔追加〕堯胤・仁悟・道永・常弘・宗清

〔巻頭歌〕てにならずものにもがなや秋たちて扇にかふる袖の月かげ

〔巻軸歌〕たのまじなうきみはよはる玉の緒のたえてつれなき人の契りを

⑩ 永正八年八月廿五日（尾題）

〔歌題と作者〕年内立春・宣胤 野霞・貞敦 海霞・政為 竹鷲・道永 原若菜・茶地丸 暗夜梅・実隆 門柳・

常弘 故郷春月・堯胤 帰鴈連雲・仁悟 尋花・（後柏原天皇） 栽花・実香 花忘老・季経 挿頭

花・邦高 花下忘帰・和長 朝春雨・季種 春曙・宣秀 庭董・宗清 河款冬・重治 夕藤・守光

三月尽夜・元長 杜首夏・俊量 籬卯花・尚顕 待郭公・公音 郭公一声・公条 暁郭公・永宣

盧橘薫・康親 簷菖蒲・為学 橋五月雨・為和 瀬鵜河・実胤 沢夏草・隆康 野夕立・雅綱 水

辺夏月・言綱 蛩過窓・伊長 松下納涼・秀房 河夏祓・宗藤 山早秋・邦高 二星適逢・重親

聞萩・源諸仲 岡萩・宗清 浅茅露・堯胤 虫怨・実隆 閑虫秋夕・季種 嶺鹿・宣胤 葦辺鴈・

守光 月出山・政為 月契秋・道永 浦月・（後柏原天皇） 滝月・常弘 月前行客・貞敦 擣衣到

暁・仁悟 菊久馥・実香 梯霧・茶地丸 初紅葉・元長 紅紅葉・永宣 鐘声送秋・季経 里初秋

・堯胤 時雨易過・邦高 聞落葉・政為 冬田霜・俊量 澗寒草・和長 江寒蘆・重治 冬夕嵐・

永宣 汀氷・実隆 寒夜千鳥・（後柏原天皇） 池水鳥・康親 霰残夢・隆康 積雪・宗清 依雪待

人・宣秀 雪似花・仁悟 歳暮近・公条 寄天恋・道永 寄月恋・公音 寄雨恋・尚顕 寄烟恋・

(詠歌・作者不記) 寄山恋・守光 寄杜恋・邦高 寄江恋・俊量 寄磯恋・季経 寄杉恋・為和

寄榊恋・宣胤 寄忍草恋・実隆 寄嶋恋・源諸仲 寄蛛恋・秀房 寄糸恋・元長 寄木綿恋・季種

杜頭鶏・宗清 古寺鐘・尚顕 鞆中雨・政為 鞆中関・常弘 鞆中衣・言綱 山家雲・雅綱 山家

鳥・宗藤 山家経年・(後柏原天皇) 窓竹・為学 路芝・重親 砌松・実胤 麓柴・伊長 寄玉述

懷・重治 寄船述懷・和長 寄日祝・実香

〔卷頭歌〕逢坂の関の冬木もかすめばや年こそこえねはるはきにけり

〔卷軸歌〕くもりなくてらす日影の朝夕にあきらけき世と君祈るなり

⑪ 永正八年九月九日(尾題)

〔端作り〕禁裏重陽御歌

〔歌題〕菊有新花

〔作者〕(後柏原天皇)・宮(貞敦親王)・実隆・宣胤・政為・季経・宗清・季種・俊量・元長・重治・宣秀・和長

・守光・永宣・公条・尚顕・公音・康親・実胤・為学・隆康・為和・雅業王・言綱・伊長・秀房・雅綱・

重親・宗藤・源諸仲

〔卷頭歌〕としごとの色香はあれど秋のきく心にふりぬけふのはつはな

〔卷軸歌〕いく秋をちぎり置てか咲そめし花にいろそふきくのしらつゆ

⑫ 永正八季九月廿五日月次和歌御会(尾題)

〔歌題〕夕霧 蔦懸松 窓燈

〔作者〕(後柏原天皇)・貞敦親王・実隆・次津日・宣胤・政為・季経・季種・俊量・元長・重治・宣秀・和長・

守光・永宣・公条・尚顕・公音・康親・実胤・為学・隆康・為和・言綱・伊長・秀房・雅綱・諸仲

〔巻頭歌〕 秋はこれあやめもわかぬおもひかな霧のうちなるそでの夕露

〔巻軸歌〕 まなばねばわが影ながら身をはぢてむかふばかりの窓の灯

⑬ 永正八年十一月廿五日月次和歌御会（尾題）

〔歌題〕 葦間水鳥 山家雪朝 恋不依人

〔作者〕（後柏原天皇）・茶地丸・邦高親王・実隆・実香・政為・季経・季種・俊量・元長・重治・雅俊・宣秀・和

長・公条・永宣・尚顕・公音・康隆・実胤・為学・康隆・為和・伊長・雅業王・言綱・雅綱・重親・諸仲

〔追加〕 堯胤・仁悟・道永・常弘

〔巻頭歌〕 塩みちてなくなるたづのかげとみし芦辺もこほる水鳥のこゑ

〔巻軸歌〕 おほけなくおもひかけめやみのほどのそれをことほる恋路なりせば

以上から、永正八年の和歌御会は、①「永正八年正月十九日和歌御会始」、②「永正八年二月廿五日」、③「永正八年三月廿五日月次和歌御会」、④「永正八年四月廿五日」、⑤「永正八年五月廿五日月次和歌御会」、⑥「永正八年六月廿五日」、⑦「永正八年七夕詩御会公宴」、⑧「永正八年七夕和歌御会公宴」、⑨「永正八年七月廿五日月次和歌御会」、⑩「永正八年八月廿五日」、⑪「永正八年九月九日禁裏重陽御歌」、⑫「永正八年九月廿五日月次和歌御会」、⑬「永正八年十一月廿五日月次和歌御会」のとおり、十三回を数える。これによると、永正八年の宮中での御会和歌は、正月十九日の御会始めを皮切りに、毎月二十五日を定例の開催日と予定していたようである。出詠者は後柏原天皇をはじめ、茶地丸（のちの後奈良天皇）などの皇室関係、邦高親王、貞敦親王などの伏見宮関係、実隆、実香、宣胤などの廷臣、堯胤、仁悟などの沙門などである。なお、永正八年の和歌御会をみると、一月、三月、

五月、七月、九月、十一月の奇数月には、当該月に関係する歌題を設定して詠む、所謂、月次御会が企画されているが、就中、七月には「七夕詩御会」と「七夕和歌御会」とが、また、九月には「禁裏重陽御歌」が特別に企画されている。一方、二月、四月、六月、八月の偶数月には、一定数の歌を歌題を分けとって詠む、所謂、(公宴) 続歌が企画されている。ちなみに、当年は十月、十二月の両月は続歌が企画されていないが(何らかの事情で中止された)であろうが、その理由は判明しない)、前年の永正七年の当該月には公宴続歌が企画されているので、慣例としては偶数月には続歌の催行が企画されていたようである。

要するに、御会和歌においては、奇数月には月次和歌が、偶数月には続歌が交互に企画され、その出詠者は天皇をはじめとした皇室関係者、伏見宮関係者、廷臣および沙門などであったということができようであろう。

三 「永正八年七月二十五日月次和歌御会」

さて、当面の課題である七月二十五日に企図された御会は、『公宴続歌』の⑨「永正八年七月廿五日和歌御会」が該当する。たとえば、『公宴続歌』の「式部卿邦高親王」の詠歌を掲げてみると、

- (1) 三日月の秋ほのめかすひかりにも思ひそふべきゆふべをぞしる
(初秋月)
- (2) 吹たびにかぜや尾花がおもひ草なびくにつけて露ぞこぼる、
(風前薄)
- (3) きえぬまの袖のしら玉よしさらばおもひをはらふひかりともなれ
(寄玉恋)

のとおりで、大阪青山短期大学蔵の和歌懷紙『秋日詠三首和歌』(以下『和歌懷紙』と略称する)の当該歌と、(1)の初句「三日月の」(和歌懷紙は「見る月の」とする)に異同が指摘されるが、まさに符合する。また、『和歌懷紙』には所収しない後柏原天皇、茶地丸(のちの後奈良天皇)、権大納言藤原政為の各歌を掲載すると、

(4) てにならすものにもがなや秋たちて扇にかふる袖の月かけ (後柏原天皇・初秋月)

(5) かぜたかきやなぎもあれど我門のひとむらすゝきまづみだれつゝ (風前薄)

(6) たきつせに玉ちるほどのおもひをもたれなくさめと袖はほさまし (寄玉恋)

(7) 夕月夜ひかりの中にしらるゝや身にしむ色の秋のはつかぜ (茶地丸・初秋月)

(8) 山もとのきりのたえまのむらくゝに尾花をみする野べの夕風 (風前薄)

(9) はかなしや袖のなみだの玉のをのあはずは何にみだれそめけん (寄玉恋)

(10) いねがてにかくていく夜の月かみん秋になりぬるそらずすゝしき (権大納言藤原政為・初秋月)

(11) なびきあふ尾花はしるや秋風にたが思ひぐさ色にいづらん (風前薄)

(12) おもふかひありてひろはむ玉もがな枕のしたのしほひまつ身に (寄玉恋)

のごとくで、伊井氏が推測されたように、『柏玉集』の後柏原天皇の詠、『後奈良院御集』の後奈良天皇の詠、『碧玉集』の政為の詠と各々、一致する。したがって、これらの事例から、『和歌懷紙』の詠歌が「永正八年七月二十五日御会和歌」であることは、まず動かない事実であろう。そこで『公宴続歌』に収載される歌人に言及すると、全部で三十七人を数えることができる。ただ、『和歌懷紙』に所収する「按察使源俊量」と「藏人中務丞源諸仲」の二人の詠歌は『公宴続歌』には収載されていないが、何故にこの二人の詠作が収載されていないのかの理由は不明である。

したがって、ここに「永正八年七月二十五日月次和歌御会」に出詠した人物を、『公宴続歌』と『和歌懷紙』によって掲げるならば、次の三十九人となろう。

- | | | | | | | | | |
|---|-------|---|---------------|---|---------|---|---------|---|
| 1 | 後柏原天皇 | 2 | 茶地丸(のちの後奈良天皇) | 3 | 式部卿邦高親王 | 4 | 中務卿貞敦親王 | 5 |
|---|-------|---|---------------|---|---------|---|---------|---|

正二位実隆 6 内大臣実香 7 権大納言藤原宣胤 8 権大納言藤原政為 9 権大納言季経

10 季種 11 権中納言元長 12 兵部卿源重治 13 権中納言藤原宣秀 14 大蔵卿菅原和長 15

権中納言藤原守光 16 参議永宣 17 参議右近権中将藤原公条 18 参議左大弁藤原尚顕 19 参

議左近衛権中将藤原公音 20 参議左近衛権中将藤原季綱 21 参議右大弁冬光 22 左近衛権中将藤原

康親 23 右近衛権中将藤原実胤 24 少納言菅原為学 25 左近衛権中将藤原隆康 26 左近衛権中

冷泉為和 27 神祇伯雅業王 28 内蔵頭藤原言綱 29 蔵人左中弁藤原伊長 30 蔵人右中弁藤原秀

房 31 左近衛権少将藤原雅綱 32 右近衛権少将藤原重親 33 按察使源俊量 34 蔵人中務丞源諸

仲 35 堯胤 36 沙門仁悟 37 沙門道永 38 沙門常弘 39 沙門宗清

現在、「永正八年七月二十五日月次和歌御会」に出詠した歌人は以上の三十九人であるが、このうち、その詠作が知られていないのは、4の貞敦親王、7の宣胤、26の為和、35の堯胤、36の仁悟、37の道永、38の常弘、39の宗清の八人である。そこで、この八人の詠歌を各々、次に紹介すれば、以下のとおりである。

4 中務卿貞敦親王

(13) 秋きてはまだはつかぜの草のはらとひくる月ぞならしがほなる (初秋月)

(14) はなすゝきおもひみだるゝ秋もうし露と風とををのがすがたに (風前薄)

(15) わがそでにもろきなみだの玉はあれどなにぞばかりとふ人もなし (寄玉恋)

7 権大納言藤原宣胤

(16) いねがてにかくていく夜の月かみん秋になりぬるそらぞすゝしき (初秋月)

(17) とけゆくもむすばゝるゝもいとすゝきいくたびかぜの吹かはるらん (風前薄)

(18) 青芻一つかねにてその人を玉のごとしといはでしらせむ

(寄玉恋)

26 左近衛権中将藤原為和

(19) 雲井よりあすは来ぬらん四方の海のおもがはりしてうつる月影

(初秋月)

(20) おきつかぜ吹たゆむまも白妙の尾花にたかきまの、うらなみ

(風前薄)

(21) ことのほの露もかけじの玉の緒よたへば絶ねとおもふばかりぞ

(寄玉恋)

35 堯胤

(22) 天河ひと夜のなみのすゑよりぞすみまさりゆく月は見えけり

(初秋月)

(23) たがゆるす秋とてをのがやどもせにおばなかりふきちらす山かぜ

(風前薄)

(24) むすぶ手にたまる水のすみがたきうき世にあかぬほどはしるらし

(寄玉恋)

36 沙門仁悟

(25) 一葉ちるとばかり見ゆる木のまよりさはらで出る秋の三日づき

(初秋月)

(26) 秋かぜにちりかふ露のつかねをもむすぽふれたるいとすゝきかな

(風前薄)

(27) あふことをころものうらの玉とのみ心にかけてとしをふるかな

(寄玉恋)

37 道永

(28) 入かげもみるほどなしや初秋の雲間にほそき弓はりの月

(初秋月)

(29) 野をひろみかたもさだめぬ秋風によりかへさるゝ糸すゝきかな

(風前薄)

(30) 人はさてかけてもしるしから衣なみだの玉も身のまよひとを

(寄玉恋)

38 沙門常弘

(31) 秋きぬとおもへばかはるかぜの音も月よりきゝし夕暮のそら (初秋月)

(32) 露はらふ袖とぞみつる初尾花たが手枕の野べのあきかぜ (風前薄)

(33) 人しれぬ心にむすぶ玉のをのけてみだれぬなみだともがな (寄玉恋)

39 宗清

(34) うつりゆかん梢の秋も一はよりまづほのめくや三日月のかげ (初秋月)

(35) 心とやおばなはやどす袖の露をうけくに秋とはらふ夕かぜ (風前薄)

(36) うき中の心のやみよいかさまの玉かとぶ夜のひかりとは見ん (寄玉恋)

以上が「永正八年七月二十五日月次和歌御会」における新出の八人の各三首だが、これによって、伊井氏の提起された本月次和歌の出詠者の実態がさらに明白になったと言えるであろう。

そこで、この御会和歌に出詠の三十九人の事蹟に簡単に触れておこう。

1 後柏原天皇 寛正五年（一四六四）十月二十日誕生、大永六年（一五二六）四月七日没、享年六十三歳。第百四代

天皇。父は後土御門天皇。家集に『碧玉集』がある。

2 茶地丸（後奈良天皇） 明応五年（一四九六）誕生、弘治三年（一五五七）没、享年六十二歳。第百五代天皇。父

は後柏原天皇。天文十一年（一五四三）『大神宮法樂千首』を催すほか、家集に『後奈良院御集』がある。

3 伏見宮邦高親王 康正二年（一四六六）誕生、享禄五年（一五三三）没、享年七十七歳。伏見宮第五世。父は貞常親王。後に後土御門院の猶子となる。家集に『邦高親王御集』がある。

4 伏見宮貞敦親王 延徳元年（一四八九）誕生、元亀三年（一五七三）七月二十五日没、享年八十四歳。伏見宮第六世。父は邦高親王。後柏原天皇の猶子となる。

5 三条西実隆 康正元年（二四五）誕生、天文六年（二五七）十月三日没、享年八十三歳。父は三条西公保。長禄二年（二五六）叙爵、文龜二年（二五三）正二位、永正三年（二五六）内大臣に進む。家集に『再昌草』『雪玉集』、日記に『実隆公記』がある。

6 三条実香 文明元年（二四九）誕生、永禄二年（二五九）二月二十五日没、享年九十一歳。三条公敦の男。長享元年（二四七）従三位に叙され、永正元年（二五〇）正二位に進み、同四年内大臣、同十五年左大臣に、天文四年（二五五）太政大臣に任じられる。同六年出家、法名、諦空。『白馬節会職事要』『水無瀬法楽』（永正十五年）などの著作がある。

7 中御門宣胤 嘉吉二年（二四三）誕生、大永五年（二五五）十一月十七日没、享年八十四歳。中御門明豊の男。嘉吉三年（二四三）叙爵、文正元年（二四六）参議に任じられ、長享二年（二四八）権大納言に進む。永正八年（二五二）従一位に進むが、出家。法名、乗光。日記に『宣胤卿記』、注釈書に『万葉類葉抄』などがある。

8 冷泉政為 文安二年（二四五）誕生、大永三年（二五三）九月二十一日没、享年七十九歳。冷泉持為の男。永正三年（二五六）権大納言に至ったが、同十年出家。法名、曉覚。家集に『碧玉集』がある、『一人三臣和歌』の作者。

9 四辻季経 文安四年（二四七）誕生、大永四年（二五四）三月二十九日没、享年七十八歳。四辻季春の男。文安六年（二四九）叙爵、長禄四年（二四〇）侍従に任じられ、明応十年（二五〇）正二位に進み、永正三年（二五六）権大納言に任じられたが、大永三年（二五四）出家。法名、宗空。『蹴鞠家伝書』がある。

10 小倉季種 康正二年（二四六）誕生、享禄二年（二五九）四月十七日没、享年七十四歳。正親町持季の次男。

小倉実右の養子となり、季熙と名乗ったが、長享二年（一四八）に季種と改名。永正三年（一五〇六）権大納言に任じられ、同八年正二位に進むが、享禄二年（一五五九）出家。法名、空恵。

- 11 甘露寺元長 長禄元年（一三三〇）年誕生、大永七年（一五三〇）八月十七日没、享年七十一歳。甘露寺親長の長男。文正元年（一四六六）叙爵。永正十四年（一五三六）正二位に進み、権大納言に任じられる。大永六年（一五三六）従一位に進むが、翌年死す。法名、清空。「大永七年五月四日中務卿宮甘露寺等と漢聯句」、「甘露寺卿記」がある。

- 12 田向重治 享徳元年（一四五三）誕生、天文四年（一五三五）七月二十一日没、享年八十四歳。田向経家の男。長享二年（一四八八）従三位に叙され、明応八年（一四九九）権中納言に任ぜられ、文亀元年（一五〇二）従二位に進む。「延徳二年七月二十六日御・源宰相両吟何船百韻」「文明十七年六月二十六日中御門中納言宗巧等夕何百韻」などの連歌作品がある。

- 13 中御門宣秀 文明元年（一四六九）八月十七日誕生、享禄四年（一五三三）七月九日没、享年六十三歳。中御門宣胤の男。母は甘露寺親長の女。文明三年（一四七二）叙爵、永正元年（一五〇四）権中納言、同十五年権大納言に任じられ、享禄四年（一五三三）従一位に進む。「永正十六年十二月十六日中御門大納言一位大納言等何船百韻」「享禄三年和漢聯句」「宣胤卿記」などがある。

- 14 東坊城和長 長禄三年（一四三〇）誕生、享禄二年（一五三九）十二月二十日没、享年七十歳。東坊城長清の男。文明十一年（一四七九）文章得業生となる。同十五年叙爵、永正六年（一五三九）大蔵卿に任じられ、同十五年正二位に進み、同十七年権大納言に任じられる。法名、宗鳳。

- 15 広橋守光 文明三年（一四七一）三月五日誕生、大永六年（一五三六）四月一日没、享年五十六歳。町広光の男。

母は園基有の女。文明十一年（二四七）叙爵、広橋兼顕の養子となり、同十五年侍従に任じられる。永正五年（二五〇）正三位に進み、同十五年権大納言に任じられる。法名、祐寂。『白馬節会次第』『宣旨部類』『内侍所臨時御神楽廻文』『守光公記』などがある。

- 16 冷泉永宣 寛正五年（二四四）誕生、大永六年（二五三）六月二十五日六十三歳で出家したが、天文十一年（二五三）までは生存した。法名、宗倫。冷泉永親の男。文明十一年（二四九）叙爵、文龜三年（二五〇）従三位に進み、同四年参議、同年三月二十九日権中納言に任じられる。「永正九年試筆十首」「後奈良院御着到百首」（天文十一年）「大永三年三月十八日新古今集詞百韻」などがある。

- 17 三条西公条 文明十九年（二四七）年五月二十一日誕生、永録六年（二五三）十二月二日没、享年七十七歳。三条西実隆の次男。母は勧修寺教秀の女。長享二年（二四八）叙爵、永正四年（二五七）従三位に進み参議、同八年権中納言、天文十一年（二五三）右大臣に任じられる。同十三年出家、法名、仍覚。称名院と号す。父実隆から『古今集』『伊勢物語』を伝授し、古典学の師範となった。家集に『称名院集』、日記に『公条公記』がある。

- 18 日重次尚顕 文明十年（二四六）誕生、永録二年（二五九）八月二十八日没、享年八十二歳。勧修寺政顕の男。長享元年（二四七）叙爵、永正五年（二五〇）従三位に進み、同九年権中納言に、大永三年（二五三）権大納言に任じられ、同六年正二位に進むが、天文元年（二五三）五十五歳で出家。法名、泰竜。『御経供養記』『尚顕卿御記』がある。

- 19 四辻公音 文明十三年（二四二）誕生、天文九年（二五〇）七月十七日没、享年六十歳。四辻実仲の男。文明十七年（二四八）叙爵、永正五年参議に任じられ、大永六年（二五三）正二位に進み、同八年権大納言に至

る。「天文八年二月二十五日御・按察使大納言等何船百韻」などがある。

- 20 阿野季綱 文明三年（一四七）誕生、永正八年（一五二）九月十六日没、享年四十歳。阿野公熙の男。母は勸修寺経成の女。永正五年（一五〇）従四位上に叙され、参議に任じられる。同八年正月従三位に進むが、九月没す。法名、道健。

- 21 烏丸冬光 文明五年（一四三）誕生、永正十三年（一五六）五月五日没、享年四十四歳。日野勝光の三男。烏丸資任の養子になる。永正五年（一五〇）参議に叙され、同十一年権中納言に任じられ、同十二年正三位に進む。

- 22 中山康親 文明十七年（一四五）誕生、天文七年（一五八）八月十四日没、享年五十四歳。中山宣親の男。長享元年（一四七）叙爵。永正八年（一五二）参議に任じられ、同十二年正三位に進み、翌年権中納言に、大永六年（一五三）正二位権大納言に至る。天文二年（一五三）出家、法名、祐清。『白馬節会外弁要』『康親卿記』などがある。

- 23 正親町実胤 延徳二年（一四九）誕生、永禄九年（一五六）九月十六日没、享年七十七歳。正親町公兼の長男。明応元年（一四九）叙爵。永正五年（一五〇）藏人頭・右中将に任じられ、初名の実枝を実胤と改名。同十三年正三位に進み、同十五年権中納言に、享禄元年（一五三）権大納言に任じられ、同十年従一位に進むが、出家、法名、空円。『二位大納言実胤卿御記』がある。

- 24 五条為学 文明四年（一四三）誕生、天文十二年（一五三）六月三十日没、享年七十二歳。五条為親の男。長享三年（一四九）叙爵。永正十三年（一五六）参議に任じられ、享禄元年（一五三）正二位に進み、天文十年（一五三）権大納言に任じられる。「享禄三年世吉和漢聯句」「大永七年十一月二日前菅中納言源宰相中将

等和漢聯句』『拾芥記』などがある。

- 25 鷺尾隆康 文明十七年（一四八五）誕生、天文二年（一五三三）没、享年四十九歳。鷺尾隆頼の男。長享二年（一四八八）叙爵。永正五年（一五〇〇）左中将に、同十八年権中納言に任じられ、大永七年（一五二七）正二位に進む。法名、盛重。「永正十七年六月七日冷泉中納言鷺尾宰相等草木百韻」「享禄二年禁裏千句拔書」「大永二年六月三日鷺尾中納言重親朝臣等和漢聯句」などがある。

- 26 冷泉為和 文明十七年（一四八五）誕生、天文十八年（一五四八）七月十日没、享年六十四歳。冷泉為広の男。長享二年（一四八八）叙爵。永正三年（一五〇六）左少将、同十二年右衛門督、同十八年権中納言に任じられ、大永四年（一五二四）従二位に進み、天文十年（一五五二）権大納言に任じられる。同十七年出家、法名、静清。「聖廟法楽和歌』『為和記』『為和卿集』などがある。

- 27 白川雅業王 長享二年（一四八八）誕生、永禄三年（一五五〇）九月十二日没、享年七十三歳。白川資氏王の男。明応九年（一五〇〇）叙爵。文亀元年（一五〇二）白川忠富王の養子になり、初名の雅益を雅業と改名。永正七年（一五二〇）神祇伯に任じられ、王を名乗る。天文五年（一五三六）正二位に進む。「神祇官御太刀神馬事」「雅業王記』がある。

- 28 山科言綱 文明十八（一四八六）誕生、天文十七年（一五四八）九月十二日没、享年四十五歳。山科言国の男。母は高倉永継の女。明応元年（一四九三）叙爵。同九年内蔵頭、永正四年（一五〇七）右近権少将を兼ね、同十八年参議、大永六年（一五二六）権中納言に任じられ、享禄二年（一五三〇）従二位に進む。法名、宗言。『葉種調味抄』の編著がある。

- 29 甘露寺伊長 文明十六年（一四八四）誕生、天文十七年（一五四八）十二月三十日没、享年六十五歳。甘露寺元長

の男。母は高倉永継の女。長享元年（二四七）叙爵。永正七年（二五〇）左中弁、同十五年左大弁・参議、天文三年（二五四）権大納言に任じられ、同十七年従一位に進む。「享禄三年和漢聯句」「古今序註」「天文十七年八月按察山科中納言等歡喜天法樂千句」「秘歌集」などがある。

- 30 万里小路秀房 明応元年（二四九）誕生、永録六年（二五三）十一月十二日没、享年七十二歳。万里小路賢房の男。初名、量房。明応三年（二四九）叙爵。永正七年（二五〇）右中弁、同十八年右大弁・参議に任じられ、大永四年（二五三）正三位に進み、左大弁、同五年権中納言に任じられ、天文五年（二五三）正二位に進み、権大納言、同十五年内大臣に任じられる。同二十年出家、法名、等祺。「享禄元年九月十三日帥大納言万里小路中納言等和漢聯句」「秀房公記」などがある。

- 31 飛鳥井雅綱 延徳元年（二四九）誕生、永録六年（二五三）十月五日没、享年七十五歳。飛鳥井雅俊の男。明応四年（二四九）叙爵。永正六年（二五〇）正五位下、大永四年（二五三）に進み、左衛門督・参議に任じられ、天文七年（二五三）正二位権大納言に任じられる。永録六年（二五三）出家、法名、高雅。『蹴鞠聞書』『伏見宮家百首和歌』などがある。

- 32 庭田重親 明応四年（二四九）誕生、天文二年（二五三）十二月二十四日没、享年三十七歳。中山宣親の次男。庭田重経と中山康親の家督を継ぐ。文亀元年（二五〇）叙爵。永正七年（二五〇）正五位下、大永四年（二五四）従三位に進み、参議に任じられる。享禄元年（二五三）権中納言に任じられ、同三年正三位に進む。「大永七年九月十三日万里小路中納言源宰相中将等和漢聯句」「大永二年六月三日鷲尾中納言重親朝臣等和漢聯句」などがある。

- 33 綾小路俊量 宝徳三年（二四二）誕生、永正十五年（二五八）七月十日没、享年六十八歳。綾小路有俊の男。

長祿四年（一四〇）叙爵。長享二年（一四八）正三位に進み、明応七年（一四九）按察使に任じられ、文亀三年（一五〇）正二位に進むが、永正十一年（一五二）出家、法名、量琇。「郢曲今様」「明応七年十月十五日不遠院宮按察使等何人百韻」「綾小路俊量詠百首和歌」などがある。

34 五辻諸仲 長享元年（一四七）誕生、天文九年（一五〇）十月二十八日没、享年五十四歳。五辻富仲の男。大永三年（一五三）叙爵、左兵衛権佐に任じられる。天文三年（一五三）正四位上に進み、左京大夫・治部卿に任じられ、同七年従三位に進む。「永正十年御会始」「藏人拝賀記」などがある。

35 堯胤法親王 長祿元年（一四七）誕生、永正十六年（一五九）八月二十六日没、享年六十三歳。伏見宮貞常親王第二皇子。母は盈子。後花園天皇の猶子。応仁二年（一四八）准三宮義承大僧正の資となり、梶井円融房に入室。文明三年（一四七）親王宣下を受ける。明応二年（一四九）天台座主。『魚山百首』『魚山の御法』などがある。

36 仁悟法親王 文明十四年（一四八）閏七月七日誕生、永正十二年（一五五）閏二月十二日没、享年三十四歳。後土御門天皇の皇子。円満院門主。明応七年（一四八）出家、初め仁尊といい、のち仁悟と改める。同年親王宣下を受け、永正五年（一五八）二品に叙せられる。

37 道永法親王 生年不詳、天文四年（一五五）一月二十一日没、享年不詳。伏見宮貞常親王の第三皇子。後土御門天皇の猶子。御室。文明四年（一四八）八月親王宣下を受け、高平と称す。同七年四月仁和寺真光院大僧正禅信の資となり、入寺得度す。法諱を道什、のち道永と改める。永正十三年（一五三）十二月仁和寺法金剛院に入室。「延徳四年四月十九日御・親王御方等何木百韻」がある。

38 常弘法親王 寛正二年（一四二）誕生、永正十年（一五三）八月二十八日没、享年五十三歳。伏見宮貞常親王

の第四皇子。恒法法親王の資となり、勸修寺に入室。文明十年（一四七八）十一月荒神清寺で得度、法諱を常弘といったが、のちの覚円と改める。同十四年後土御門天皇の猶子となる。同十五年二月親王宣下を受け、名を常信と賜る。明応三年（一四九四）八月勸修寺長吏となり、永正十年（一五三三）八月二品に除せられる。

39 宗清 宝徳二年（一四五〇）誕生、大永六年（一五三六）七月二十三日、没、享年七十七歳。冷泉為広。冷泉為富の男。母は丹波重長の女。享徳元年（一四五三）叙爵。寛正五年（一四六四）左近衛権少将に任じられ、明応十年（一五〇二）正二位に進み、永正三年（一五〇六）権大納言に至る。同五年四月義澄に殉じて出家、法名、宗清。『一人三臣和歌』の作者。『清玉集』『為広卿詠草』がある。

以上、簡単に本月次和歌御会に出詠した三十九人の事蹟に触れたが、永正八年七月の時点で、これらの歌人を概観すると、後柏原天皇とその皇子である茶地丸、および後柏原天皇の父・後土御門天皇の皇子である仁悟法親王、ならびにその猶子となった堯胤法親王・道永法親王・常弘法親王（いずれも伏見宮貞常親王の皇子）、およびその兄・伏見宮邦高親王とその皇子貞敦親王などの皇室関係者のグループと、三条西実隆、三条実香、中御門宣胤以下のいわゆる廷臣歌人のグループにわけられるようである。ちなみに、永正八年の時点で、本月次和歌御会に出詠していない公卿以上の人物を『公卿補任』から拾うと、関白左大臣正二位九条尚経、太政大臣従一位徳大寺実淳、右大臣正二位鷹司兼輔、権大納言正二位松木宗綱、同従二位高辻長直、同正三条実望、同足利義尹、同正三位大炊御門経名、同北畠材親、権中納言正二位六条有继、同正三位飛鳥井雅俊、同徳大寺公胤、同久我通言、今出川季孝、参議従三位姉小路济继、同高辻章長、同松殿忠顕のごとくである。以上から、本月次和歌御会には、公卿以上の廷臣のほとんどが出詠している実態が知られ、宮中月次御会の命脈が依然として保たれていることも知られよう。

四 「永正八年七月二十五日月次和歌御会」の特色

それでは、「永正八年七月二十五日月次御会」にはいかなる特色が指摘しうるであろうか。そこで「初秋月」「風前薄」「寄玉恋」の三つの歌題について検討してみると、まず「初秋月」は『建仁元年十一月、後鳥羽院五十首』にみえ、藤原家隆の『壬二集』、慈円の『拾玉集』、西行の『山家集』、定家の『拾遺愚草』、藤原良経の『秋篠月清集』などにも認めることができるので、新古今時代に流行した歌題と知られよう。次に、「風前薄」の題は、瞿麦会編の『平安和歌歌題索引』（平成六・一二増補版、瞿麦会）には見えず、『明題部類抄』（板本）によると、初出は藤原光俊（真観）の出題による『三百六十首』であるようで、鎌倉中期ごろの案出であろうか。最後に「寄玉恋」については、『貞永元年七月大殿歌合、恋十首』の定家の詠が古い例で、この題が流行したのは『宝治二年、正月、後嵯峨院初度百首』、『建長七年大納言顯朝卿野々宮亭千首』、『文永二年七月七日の『白河殿七百首』、『文永八年六月、中務卿親王家歌合、百首』、『前大納言為家卿、中院亭千首』などの作品に認められる点から、鎌倉中期ごろであろう。

となると、本月次和歌御会で試みられた歌題は、新古今時代ごろから詠じられ始めて、鎌倉中期頃にはやった歌題を採用したといえるであろう。

次に、本百月次和歌御会の詠歌を吟味してみると、たとえば、「初秋月」の題の広橋守光や三条西公条の詠歌をみると、

- (37) 秋きぬとめにはさやかに三日月の見えけるものを風ならねども
(守光)
- (38) なべてよのかぜは音のみ月影のめにはさやかに秋をみせけり
(公条)

の(37)・(38)のごとく、例の『古今集』の秋上の冒頭の藤原敏行の

(39) あききぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる

(二六九)

の(39)の本歌取りと直ちに判明するような稚拙な歌や、また、「寄玉恋」の題の重親の

(40) たのまじなうきみはよはる玉の緒のたえてつれなき人の契りを

(重親)

の(40)の詠のように、一見して、『新古今集』の恋一の「忍恋」の式子内親王の

(41) たまのをよたえなばたえねながらへばしのぶることのよわりもぞする

(一〇三四)

の(41)の詠が発想の下敷きであると類推され、また表現的には、第三・四句の「玉の緒のたえてつれなき」の措辞は、

『古今集』の恋三の紀友則の

(42) したにのみこふればくるし玉の緒のたえてみだれむ人などがめそ

(六六七)

の(42)の傍線部の措辞に、同じく『古今集』の恋二の壬生忠峯の

(43) 風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か

(六〇一)

の(43)の第四句にそれぞれ依拠している背景も一目で知られ、さらに、初句の「たのまじな」と結句の「人のちぎり

を」の措辞も、『続千載集』の恋二の藤原宗宣の

(44) たのまじないのちもしらぬ世中に人の契はまことなりとも

(二二七七)

の(44)の傍線部にみられるように、陳腐な用語を使用したありふれた内容の詠歌も指摘される。

しかし、本月次和歌御会の大半の歌は、平明にして典雅な歌ことばを駆使して、二条派和歌の伝統を継承したごとき、優雅な和歌世界の詠出に終始しているように推測される。その典型的な事例のいくつかを次に引いて、説明してみよう。

まず、「初秋月」の題の詠歌からみると、茶地丸の

(45) 夕月夜ひかりの中にしらるゝや身にしむ色の秋のはつかぜ

(茶地丸)

の(45)の詠は、『新古今集』の恋五の藤原定家の

(46) しろたへの袖のわかれに露おちて身にしむ色の秋風ぞふく

(一二三三六)

の(46)の歌を本歌取りして、「夕月」の「ひかりの中に」「身にしむ色の秋のかつかぜ」を、いわば共感覚的表現ともいふべき発想で詠じて、秀歌となっている。ちなみに、初句・第二句の「夕月夜ひかりの中に」の措辞は、『新千載集』の秋上の藤原公脩と、同じく夏の西園寺公顕の

(47) あふ瀬をやたどらずわたる夕づくよ光さしそふかささぎの橋

(七夕・公脩・三二八)

(48) 夕月夜光をそへて玉川の里のしるべとさける卯の花

(卯花・公顕・一九九)

の(47)・(48)の傍線部に同種の表現が指摘され、また、第三句の「しらるゝや」の措辞も、『新続古今集』の秋下の二条為遠の

(49) おなじ枝をわくぞとばかりしらるゝやそめあへぬ色の秋の紅葉ば

(初見紅葉・五七〇)

の(49)のごとく先行例が認められ、あるいはこれらの表現が参照されたのかも知れないが、(45)の詠のなかでは自然な落ち着いた措辞となっている。

次に、五条為学の

(50) くるゝ野の草ばの露も置あへずはつ秋かぜに月ぞほのめく

(為学)

の(50)の詠は、草の葉には露が置くにはまだ間があるころ、折から「はつ秋かぜ」が吹いてきて、空には月がほのかに顔を見せはじめたという、日暮れどきの野原の趣を、さわやかに詠出して見事な出来映えとなっているが、この

(50)の詠の下敷きになっていると憶測されるのが、『壬二集』に「秋夕露」の題で収載される家隆の

(51) 秋風にはらひぞやらぬ暮るるのの草葉のかずにおける白露

(二四二一)

(51)の歌ではなからうか。家隆の詠は、「暮るるのの草葉」に置く露があまりに次から次へと置くものだから、「秋風に」もなかなか「はらひぞやらぬ」という、野原の草の葉にしとどに置く「秋夕露」の景を描出した内容だが、この家隆の詠じた夕暮れどきの野原の趣を、傍線部の措辞を借用して、夕暮れどきの露が置き始める直前の場面の描出に転換させたのが為学の詠ではなからうか。ちなみに、「月ぞほのめく」の措辞は、『玉葉集』の雑一の読人不知の

(52) ほととぎすかたらふかたや山のはにむら雨すぎて月ぞほのめく

(郭公・一九二四)

(52)の詠や、『風雅集』の秋中の永福門院内侍、藤原経顕の

(53) 雁のなく夕の空のうす空にまだかげみえぬ月ぞほのめく

(永福門院内侍・五四四)

(54) たちならぶ松の木のにみえそめて山のはつかに月ぞほのめく

(秋・経顕・五八三)

(53)・(54)の詠に認められるが、いずれも「山のは」「夕の空」「木のみ」などの空間に「月ぞほのめく」景を視覚の視点で捉えるのに対し、為学の場合は、「はつ秋かぜに」と「月ぞほのめく」との表現で、聴覚と視覚の二つの視点で捉えているところが新しいように思われる。

次に、「風前薄」の題の詠歌を検討すると、三条西公条の

(55) ほにいで、なびくをみれば花す、き人のそでまで露の秋かぜ

(公条)

(55)の詠は、先行歌に見られる歌ことばを駆使して、「風前薄」の景を無難にまとめている。たとえば、上句の措辞については、『堀河百首』の大江匡房の

(56) 花すすきはに出でてまねく比しもぞ過行く秋はとまらざりける

(六二六)

の(56)の詠をはじめとして、『新統古今集』の秋上の藤原範輔の

(57) 岡のべの一むらすすすきはにいでてまねくをみれば秋はきにけり

(題しらず・三五九)

の(57)の詠などの用例を探すが、公条の場合、薄を「まねく」と表現しないで「なびく」と捉えている点に、先行例との異同が認められる。また、結句の「露の秋かぜ」の措辞は、『後鳥羽院御集』の

(58) よひよひに思ひやいづるいづみなるしのだの森の露の木がらし

(夜恋・一七三〇)

の(58)の詠に指摘される「露の木がらし」の措辞を援用したとおぼしき『文保百首』の藤原定房の詠や、『為尹千首』

『正徹千首』の次の

(59) わが袖のたぐひもあるをきりぎりすいたくなわびそ露の秋風

(文保百首・定房・一四四八)

(60) 月ぞまつわけ行く袖にみだれける忍ぶが原の露の秋風

(為尹千首・原露・三二三)

(61) ちらすなよ老木のははそいま一のあひみんまでの露の秋かぜ

(正徹千首・柞紅葉・四七九)

の(59)~(61)の詠に用例を探すが、この措辞は『続千載集』以降に流行した歌ことばで、公条の好尚の一端が窺知されよう。

次に、白川雅業王の

(62) 野をとをみ露ふきしほる秋かぜに尾花が袖のたへてみえぬる

(雅業王)

の(62)の詠は、「秋かぜに」よって、尾花の上に置いた露が「ふきしほる」ばかりの状態であることを、「たへてみえぬる」と遠景からの視点で詠じたところが面白いが、初句の「野をとをみ」の措辞は、普通、『万葉集』の比喩歌の

(63) 上毛野の安蘇山葛野を広み延ひにしものを何か絶えせむ

(三四五三)

の(63)のごとき用例しか認められないなかで、多少不自然の感じは免れまいが、珍しい措辞である。また、「尾花が袖」の措辞は、『続千載集』の秋上の大江頼重、『新千載集』の秋上の賀茂氏久、雑下の藤原基俊の次の

(64) かり衣すそのの霧ははれにけりをばなが袖に露をのこして (霧・頼重・四三三)

(65) まねくともよそにぞ月の過ぎなましを花が袖に露のおかずは (題しらず・氏久・四三三)

(66) 露ふかきを花が袖をひかへつつなくなく秋をとどめつるかな (九月尽・基俊・二二五六)

の(64)~(66)の詠のごとき用例を拾うことができるが、「あき風におばなが袖のたへて見えぬる」の措辞となると、その先行例を探索しえない。ただ、「たへて見えぬる」の措辞は、旅寝の月に対する思いを詠じた歌に、『新葉集』の
 鞆旅の後村上院の

(67) みやこをもおなじ光と思はずは旅ねの月をたへて見ましや (題しらず・五五四)

の(67)の用例を指摘することができるが、雅業王がこの詠を参考にした可能性はなからう。また、第二句の「露ふきしほる」の措辞は、『新編国歌大観』には用例が見出しえない表現であるが、それは「あき風」が「露吹」くさまは通常の景だが、それを「しほる」といった表現が多少違和感を感じさせる措辞になっているかもしれないが、そこには意表をつく雅業王の造語形成の跡がみられるように憶測される。

次に、三条西実隆の

(68) こと草やなきこ、ちする花す、き袖のなかなる野辺の秋かぜ (実隆)

の(68)の詠は、「秋かぜ」が「袖のなか」にしか吹かないために、静止した「花す、き」が野辺一面をおおいつくして、花薄以外には秋の草花は目に入らないという趣を詠じた歌だが、このあたり一面花薄ばかりの野辺の趣を「こと草やなきこ、ちする」と発想する点には、やや作作的な感じを否めないが、表現のうえで普通、「こと草」とい

うと「言種」のことであるのに、この歌は、和歌の世界でもほとんど使用しない「異草」の意で使用している点、多少珍しい用法である。また、「袖のなかなる」の措辞は、『古今集』の雑下の陸奥、『新後拾遺集』の恋一の二条為重の次の

(69) あかざりし袖のなかにやいりにけむわがたましひのなき心ちする

(陸奥・九九二)

(70) 涙河袖のなかなるみをなればせぜをはやしとしる人もなし

(忍恋・為重・九三五)

の(69・70)の詠にその用例を見出しえるが、この実隆の歌のように、「花すすき」と「秋かぜ」とが直接関係しない視点で詠まれているのは、新しい詠作なのかも知れない。というのは、「すすき」と「野辺の秋かぜ」との関係については、『玉葉集』の秋上の藤原有家や、『風雅集』の秋上の藤原隆祐の次の

(71) 色かはるは山が峰にしかなきて尾花ふきこす野辺の秋かぜ

(有家・五三三)

(72) 夕日さすとは山もとのさとみえてすすきふきしく野辺の秋かぜ

(遠村秋夕・隆祐・四八九)

の(71・72)の詠にみられるように、秋風は尾花を「ふきし」いたり「ふきこす」のが一般的な詠まれ方であるからである。ここにも、先行歌に指摘される歌ことばを巧みに用いて、個性的な和歌世界の詠出となりえている事例を指摘できようか。

次に、「寄玉恋」の題で詠作された歌を吟味してみると、まず、中山康親の

(73) ちるとみるなみだの滝のしら玉もつもらばつゐに名にやながれん

(康親)

の(73)の詠に、特徴を見出すことができるであろう。これは「しら玉」にことよせた悲恋の詠出だが、上句の「ちるとみるなみだの滝のしら玉」の措辞が印象的である。しかし、「なみだの滝」の措辞は、『新古今集』の雑中の在原行平、『新拾遺集』の恋五の陽徳門院中将の次の

(74) 我が世をばけふかあすかとまつかひのなみだのたきといづれたかけむ

(布引の滝・行平・一六五一)

(75) 我が袖に涙の滝ぞおちまさる人のうきせを水上にして

(陽徳門院中將・一三六三)

の(74)・(75)の詠にみられるように、一般化した表現であろう。とはいえ、この一般化した措辞を何げなく用いて、それに、『拾遺集』の雑上の藤原公任の

(76) たきの糸はたえてひさしく成りぬれど名こそ流れて猶きこえけれ

(古き滝・四四九)

の(76)の詠を本歌取りした手法は、なかなか心にくい発想ではなからうか。

次に、阿野季綱の

(77) 袖にちるなみだの玉よしさらばまよふこひぢの光ともなれ

(季綱)

の(77)の詠は、「袖にちるなみだ」に向って「まよふ恋路の光ともなれ」と、恋の悲しみを反転させた発想で詠んでいる点が面白いが、各句に用いられた表現は、いずれも古歌に見出しうる措辞ばかりである。たとえば、初句の「袖にちる」の措辞は、『秋篠月清集』の藤原良経、『拾玉集』の慈円の次の

(78) そでにちるをぎのうはばのあさつゆになみだならはす秋のはつかぜ

(良経・五二五)

(79) 袖にちる萩のうはばの朝露をほさでも月をやどしつるかな

(慈円・三六一四)

の(78)・(79)の詠のごとく新古今時代の歌人の詠に見られるし、第二句の「なみだの玉よ」の措辞は、『拾遺集』の別の紀貫之、『洞院摂政家百首』の西園寺実氏の次の

(80) とほくゆく人のたねにはわがそでの涙の玉もをしからなくに

(題しらず・貫之・三三八)

(81) 思ひだにやるかたもなしかきくらす涙の玉のちるとまがふな

(恋・実氏・一一〇〇)

の(80)・(81)の詠のように、古くから用例があるし、第三句の「よしさらば」の措辞は、『山家集』の西行の

(82) よしさらばひかりなくともたまといひてことばのちりは君みがかなん (一三五二)

の(82)の詠を初めとして枚挙にいとまがないほどである。また、第四句の「まよふこひじの」の措辞は、『新拾遺集』の恋一の洞院公賢、『新葉集』の恋一の聖尊法親王の次の

(83) 人しれぬ心ばかりにさそはれてまよふ恋ぢはとふ方もなし (公賢・九二四)

(84) 行すゑはたれにとはまし思ひ入る昨日けふだにまよふ恋ぢを (題しらず・聖尊・六七二)

の(83)・(84)の詠のごとく南北朝期の歌集にその用例を指摘でき、結句の「光ともなれ」の措辞は、『続拾遺集』の釈教の公豪、『新葉集』の雑上の祥子内親王の次の

(85) あつめおく窓の螢よ今よりは衣の玉の光ともなれ (五百弟子品・公豪・一三五〇)

(86) あつめねどねぬ夜の窓にとぶ螢心をてらす光ともなれ (螢・祥子内親王・一〇八二)

の(85)・(86)の詠に同類の表現を見出しうるが、就中、(86)の「心をてらす光ともなれ」の措辞は、季綱の詠に影響を及ぼしているように憶測される。

ところで、この季綱の詠に認められる第三句に「よしさらば」と置き、結句で「光ともなれ」と、少々自暴自棄的な口調で、自己の心情を吐露する詠にぶりは、式部卿邦高親王の

(87) きえぬまの袖のしら玉よしさらばおもひをはらふひかりともなれ (邦高親王)

の(87)の詠にも認められ、この当時に流行した発想の趣を感じさせるが、この邦高親王の詠は、『秋篠月清集』の良経の

(88) 秋風にこのまの月はもりそめてひかりをむすぶそでのしらたま (四二五)

の(88)の詠の本歌取りの趣を呈しているようだ。すなわち、いままで覆っていた雲が「秋風」によって吹き払われ、

「このまの月はもりそめて」「そでのしらたま」にも「ひかりをむすぶ」時刻となったと詠んでいる良経の詠に対し、邦高親王の詠は、良経の秋の景を恋の世界に転じて、袖に置いた「しらたま」に、ままよ、「おもひをはらふ光ともなれ」と、これまでに用例を見出しえない「おもひをはらふ」なる措辞を用いて、良経の「ひかりをむすぶ」の措辞と対応させながら、「寄玉恋」の世界を描出しているからである。ちなみに、初句の「きえむまの」の措辞は、『人麿集』、『中務集』、『玉葉集』の雑四の紫式部の

(89) 草の葉におきゐる露のきえぬまは玉かとみゆることのはかなさ

(萩・人麿・二七六)

(90) きえぬまをうきことにするたまざさのつゆはかげまつほどぞひさしき

(中務・一二八)

(91) きえぬまの身をもしるしるあさがほの露をあらそふ世を歎くかな

(紫式部・二三九一)

の(89)~(91)の詠にみられるように、中古の歌人の作品に用例が多いようだ。

以上、ほんの数例の詠歌を採りあげて検討したにすぎないが、そこには、平明にして典雅な歌ことばを駆使して、二条派和歌の伝統を継承したとき、優雅な和歌世界の詠出に苦心している、後柏原天皇のもとで企画された和歌御会に出詠した歌人たちの姿が彷彿されるようである。

五 おわりに

以上、「永正八年月次和歌御会」について、はなはだ基礎的な考察に終始してきたが、ここでこれまでに論述したきた要点を摘記し、本稿の結論にかえたいと思う。

(1) 永正八年に企画された和歌御会は都合十三回を数える。すなわち、正月十九日を皮切りに、毎月二十五日を定例の開催日に行っている(ただし、この年は実際には和歌御会は開催されなかった)。ちなみに、本年は一月、三

月、五月、七月、九月、十一月の奇数月には、月次御会が計画されているが、七月には「七夕詩御会」と「七夕和歌御会」とが、九月には「禁裏重陽御歌」が特別に企画されている。一方、二月、四月、六月、八月の偶数月には続歌が計画されているが、十月、十二月の両月は企画されていない。出詠者は後柏原天皇をはじめ、茶地丸（のちの後奈良天皇）などの皇室関係、邦高親王、貞敦親王などの伏見宮関係、実隆、実香、宣胤などの廷臣、堯胤、仁悟などの沙門の人びとである。

(2) 『公宴続歌』によれば、「永正八年七月二十五日月次和歌御会」は「初秋月」「風前薄」「寄玉恋」の三題で詠じられた。出詠者は、後柏原天皇、茶地丸（のちの後奈良天皇）、式部卿邦高親王、中務卿貞敦親王、正二位実隆、内大臣実香、権大納言藤原宣胤、権大納言政為、権大納言季経、季種、権中納言元長、兵部卿源重治、権中納言藤原宣秀、大蔵卿菅原和長、権中納言藤原守光、参議永宣、参議右近権中将藤原公条、参議左大弁藤原尚顕、参議左近衛権中将藤原公音、参議左近衛権中将藤原季綱、参議右大弁冬光、左近衛権中将藤原康親、右近衛権中将藤原実胤、少納言菅原為学、左近衛権中将藤原隆康、左近衛権中将冷泉為和、神祇伯雅業王、内蔵頭藤原言綱、蔵人左中弁藤原伊長、蔵人右中弁藤原秀房、左近衛権少将藤原雅綱、右近衛権少将藤原重親、按察使源俊量、蔵人中務丞源師仲、堯胤、沙門仁悟、沙門道永、沙門常弘、沙門宗清の三十九人である。ちなみに、貞敦親王、宣胤、為和、堯胤、仁悟、道永、常弘、宗清の八人の詠作が新出資料である。

(3) 三つの歌題のうち、「初秋月」の題の初出は『建仁元年十一月、後鳥羽院五十首』で、新古今時代に流行した歌題である。「風前薄」の題の初出は藤原光俊の出題になる『三百六十首』あたりで、鎌倉中期ごろの案出であろうか。「寄玉恋」の題の初出は『貞永元年七月大殿歌合、恋十首』の定家の詠あたりで、この題がしばしば見えるのは、後嵯峨院歌壇の所産である和歌作品であるから、鎌倉中期ごろに流行したのであろう。

(4) 「永正八年七月二十五日和歌御会」の詠作には、平明にして典雅な歌ことばを駆使して、二条派和歌の伝統を継承したとき、優美な和歌世界を詠出した佳作もま含まれ、この時代の旺盛な和歌活動の一端を現出しているように憶測される。

なお、「永正八年月次和歌御会」をめぐつては、和歌御会の実態の解明など、このほかにも検討を要する課題は少なくないと言わねばなるまい。しかし、それらの問題については一切今後の課題とすることにして、一応の結論を導き出しえたいまは、このあたりで擱筆したいと思う。

〈付記〉

本稿は、平成七年十月二十二日、熊本大学で開催された和歌文学会大会にて発表した原稿に基づいている。席上にてご教示賜った伊藤敬、宮川葉子の両氏に厚く御礼申し上げる。